

伊能忠敬「伊能忠敬自筆書簡」

〔文化4（1807）年〕

5月6日

（端裏書） 大川

猶々御家内へ宜頼入申候、已上、
一筆致啓上候、入梅ゆへか、雨天続に
御座候得共、愈御揃御堅固に可被成
御暮、珍重に存候、此許無異に罷有候、
御安意可給候、先日は本家初節句
紙幟の儀、当主人南総より祝儀に
送来候、吉例に随ひ我等より祝儀に
可相送旨、仕立は其地にて御世話
被下、紙と絵の具代金貳百疋も
我等方より可遣旨被仰越、御尤に存候、
定て御世話にて紙幟出来候儀と
察入候、代料は追々進上
可申候、
一、三治郎、おりて出府の儀、本家主人
出府の砌致相談候、東士川江戸
地面の旅宿焼失無之候得は、逗留所に
宜候得共、是も普請出来の儀如何
御座候哉、前々より出府の役宅八町堀に

小家有之候様承候、是は如何候哉、
上下の休所も相成不申せまく候哉、
桑原御新造も亀嶋へ逗留候様に
度々被申候得共、是もきうくつと
存し候、隠宅なれば申分は無之候へ共、
先月より二階にては七人、下座敷にては高橋善助、
下河辺政五郎、大盤にて日々地図を仕立
申候間、日々混雑、逗留所にも相成兼
可申候、盆前には大方片付可申と存候間、
先日手紙遣候は、若し東土川旅宿
無之、外々止宿如何に候は、盆後秋へ成、
遠国出立の支度なから、出府の儀も
可宜哉、など申談遣候、又は三治郎、
貴殿か主人か召連出府候て、おりて女は
秋の出府可宜哉、三治郎へ乳母
なれば隠宅にても宜候、本家主人え
宜御相談可被成候、

(展示箇所 ここから)

一、地図仕立、日々司天台より出役三人、
内弟子隼太、秀蔵、慶助、伊兵衛、門谷
五人、我と庄作、子之吉めし焼ともに
十一人に御座候、中食の菜、小昼の

焼飯か餅菓子、茶の類世話致候

もの無之、地図の書きものやら、朝暮の
差図やら、我等一人にかゝり、扱々
世話にこまり申候、表向斗は宜敷、
内々は前年より却て大難儀に御座候、
七月中にも地図相仕舞、八月にはいつそ
出立か宜き様に存候、御勘弁可給候、
一、蟠竜先生春より御見舞に御出府
可被下候所、疱瘡一統時行に付、
御延引の儀度々御申分に御座候、
出立前一度は御目にかゝり申度候得共、
当時は地図最中、御逗留の風雅も
無之候得は、是も益後涼敷相成、
御出府被下候儀も宜様に奉存候、
必御出府御延引の儀、御心労不被下候様、
被仰通可被下候、猶追々可得
御意候、以上、

伊能勘解由

五月六日

大川治兵衛殿

(展示箇所 二二二まで)